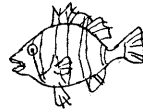


はじめがよければ、おわりもよい

ローレンス・K・フランク



ローレンス・K・フランクは、大学教授であり、相談者であり、著述家である。
ニューヨーク、キャロリン・ザックリー・研究所の前所長である。

成長、発達、学習、および人間のパーソナリティーの形成は、ひとつの段階から次の段階へと積み重なってできていく過程である。だから、発達と学習が、健全に行なわれるのに必要な初期の経験が得られないと、それから後の発達もそこなわれるかもしれないのである。

哺乳動物の若い生活体としての乳児は、そのはじめから養護し養育することによって、われわれの文化社会に参加して生活することができるようパーソナリティーにつくられていくのである。そのことに気がつくとき、人間の子どもがよい出発をするこ

とがきわめて重要であることがわかる。そのようにつくられていくためには、子どもは周囲の世界に信頼することが必要である。換言すれば、エリクソンがいうように、人間に対する基本的信頼が必要である。また、子どもが成長して、家庭の外の世界に出たときに当面するいくつもの人生の課題に、正面からとりくんでいく勇氣を必要とする。

もしも、子どもが身体の機能や、生来の衝動的行動において未成熟であったり、極度に障害を受けていたりするならば、また、もしも、栄養や養護が不十分であるならば、あるいは、もしも、

子どもが愛情や慰めを拒否され、自分自身に対する尊敬や、弱い存在としての自尊心が犯されるならば、その子どもは発達の初期の段階に「やり残した仕事」を負ったまま、人生を進まねばならないであろう。そして、いつまでも、憤慨や罪悪感の慢性的な感情になやみ、それが後の学習をそこなうことになる。

こうして、子どもは学校に入学する以前に、人生に対する基本的な態度を発達させ、われわれの社会や文化の中で生きるのに基本的な知識を学ぶのである。それは常に、家庭の中で子どもに伝えられ、また、子どもは自分なりにその経験を理解し、消化していく。「精神的ビタミン剤」すなわち、心からの愛より出ずる愛情、辛棒強く子どもを理解しようとする態度、それからとくに子どもの独自の個性を尊重して認めることを子どもは必要としているのであって、家庭でこのようなものが得られる子どもは幸いである。子どもには、できないことを期待してはならないし、また、健全な人格となるためにひとりひとりが必要としているものを奪ってはならないのである。

明日のための最善の備えは、今日を充実して生きることであるということ、子どもは十分な実例をもって示すことができると思う。赤ん坊は赤ん坊として充実して生き、幼いなりに思うように活動するうちに、赤ん坊の幼稚な活動からぬけ出す備えができてくる。こうして子どもはよちよち歩きの時代を迎える。よちよ

ち歩きの子どもは、その段階を充実して生きることによって、発達の次の段階に進むことができ、またそうしたいと積極的に望むようになる。よちよち歩きの時代を十分に生きることが、幼児となるための最善の準備である。こうして子どもは、就学前幼児としての新しい課題や機会に直面する備えができていく。

就学のための最善の準備は、就学前の幼児として生活し学ぶのに必要な環境を十分に備えることであり、その時代に適切な経験を、広くまた深く、与えることである。ナースリースクールや幼稚園の時代から、いわゆる勉強を始めたいという現代の親の圧力は、子どもから子ども時代を奪いとうとするものである。後の学業生活に能率よく適応しようとするならば、直接経験と自発的活動による学習の機会が重要なのであるが、親の圧力は幼児からその機会を奪いつつある。

子どもが学校に入学したときに示す不適応の多くは、幼児期の経験にもとづくものである。——幼児期の子どもが、幼児として生きる機会を奪い、おとなが強制した生活を与えることは、たんに幼児期のみでなく、生涯にわたって、失望感、臆病、抵抗感、またときにはおとなに対する根深い敵意の感情を培っている。このような感情は、学校にいくようになって、教師に対し、またあらゆる学業場面で示される。

子どもは、ここで、多年にわたってジョン・デューイやアーサ

ー・F・ベントリーが提唱したことを記すことによって、両親の幼児教育や学校教育に関する考え方や期待を、変革していただくようにおねがいたいと思う。

その著書「知ることと知られたこと」という書物の中で、知識とは何か獲得して分け与えることができるような、神秘的な「もの」であるという古代の考え方は、もはやすてなければならぬことを、彼らは主張している。そのような観念的な考えは、もっと力動的な考え方にかわらなければならぬ。すなわち、「知ること」とは、知ることの主体者が、すでに知られたこと、あるいは将来知られることとの間に樹立する力動的な行爲的關係である。

こうして、子どもは出生の時から、周囲の世界や人を知りはじめる。感覚器官、とくに口や手や足で、触覚を通して次第に「知ること」を学ぶ。それから次には、言語やはなしことばを通して、次には概念や観念を通して学ぶようになる。それぞれの段階の「知ること」は次の段階の「知ること」の基礎となっている。そして最初は空闊―時間的な物の世界、すなわち、いろいろのものや動物、場所、それから人に直面して、自分自身と外の世界との関係をつけていく。それから次に、実際経験を通して、記号、とくに文字が意味をもつようになり、それによって言語や概念も

意味をもち、子どもは、そのような記号の世界に自分自身を関係づけていく。

子どもが一年生に入學すると、認識面や概念的思考の上で子どもはいろいろの誤りをして、それを直すのに苦しむ。そこで幼稚園やナースリースクールは、「認識セラピー」とでもいうような役割を果たすことができる。すなわち、子どもの誤った概念や、間違った先入観、歪んだ観念などをすてて、もっとたしかな、正しい概念におきかえ、周囲の世界と「知る」関係にはいることを助けることができる。ちょうど、子どもが空想や感情のはけ口を遊びの中に見出すように、子どもは遊びの中で概念を表出し、それが固まってしまつてかえることが困難になる前に改めることを助けることができるのである。

多くの子どもたちは、不幸にも、家庭でよい出発をしていない。ナースリースクールや幼稚園や小学校では、教師が子どもたちの必要に敏感であるならば、自信と勇気を新たに与えることによって、出発点のしくじりを克服することを助けることができる。そこでは、子どもの心がまだ柔軟なうちに改めなければ、次第にハンディキャップとなるような初期の行動様式をかえていくことを助けることができるのである。

(お茶の水女子大学・津守 真訳)